

『布列私解剖圖・完』(全二巻)と その原著である Fles の解剖学書について

島田 和幸

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 神経病学講座 人体構造解剖学分野

江戸幕末期に主流であったオランダ医学が明治期に入るとともに、英語圏の医学へと変化するなかで、今回紹介する解剖図譜書は唯一明治期になっても存在した蘭書(オランダ語)本からの翻訳書である。この翻訳解剖図譜書の原本は当時の中解剖学教育で底本の一冊として使用されていた J.A. Fles 著による“Handleiding tot de stelselmatig beschrijvende Ontleedkunde van den Mensch”である。今回はこの原本の書とその原本中に記されている図のみを翻訳出版された解剖図譜書全二巻(図譜と図譜の名称を説明した書の二冊)について紹介する。原著は J.A. Fles であり、本書タイトルページの記載から外科の一等軍医であり、この書は‘S Rijks Kweekschool von Militaire Geneeskundigen’との記載からオランダ国の陸軍軍医学校の教科書であることを知ることが出来る。本文は全761ページと項目索引から構成されていて、1866年オランダの Utrecht にて B. Dekema 社から出版された第二版の書である。原本中の図譜に関しては各図譜に番号が順次つけられていて、それらの図の中の番号が入れられていてその番号に従って各部位の名称がラテン語とオランダ語により解剖名が記されている。翻訳本に関しての解説書は『布列私解剖図譜・完』と云う書名で縦×横216×10mmで、オリジナル原表紙は黄色であり、明治壬申初夏(明治5年)(1872)、大阪鎮壹病院の中欽哉により譯述されている。なおこれと同様の訳本が同年に大阪の恩々齋蔵版としても出版されている。本書では図の解剖名称が全88ページにわたり原本の図譜の番号順に列記されている。図譜本の方は『布列私解剖圖・完』と云う書名で、縦×横215×147mmでオリジナル原表紙は黄色の折帖本よりなっていて全54ページの中にオリジナル本の図に従って全246図が記載されている。この書も同様に陸軍文庫から明治5年(1872)に同時に出版されている。この図の作者に関しては恩々齋蔵版の下に浪速天満東寺之街の青野桑州との記載がある。青野桑州は伊子の生まれの銅版画家で中伊三郎の門人の一人とされている人物である。線刻銅版技術により原図を見事に写し取っている図譜書であると云える。翻訳者の中欽哉(定勝)とはどのような人物であったかに関してはその詳細は不明である。ただ中定勝の家系に関しては、緒方洪庵の師であった中天游の一族であった様である。中天游の従弟であった中伊三郎は精巧な銅版画の作者であり、中天游が死亡後、嫡子であった耕介はまだ年少であった為に中伊三郎が中環と名乗り天游の後を継ぎ、一時医業を行った。その後耕介が成長したので伊三郎は耕介に中環即ち天游の後を継がせることとなるが、その養子となったのが中欽哉(定勝)である。中欽哉(定勝)についてはかなりの蘭語(オランダ語)に精通していた人物であり、『馬療新論』(全二巻)も彼によりオランダ語から翻訳されている。今回紹介したこれらの書は解剖用語に関しても当時の用語を知る為の良い参考書となり得る書である。それ故にこの解剖図譜書の存在は意義深いものであるが、ただ残念なのは図譜書以外に原本の翻訳書が発刊されていないことである。